

ワット・ウイル・アイ・ビー・ドゥーイング・ゼン？

勝圭央

膨らんだ繊維のマイナスZ軸へ行った、三分の一日後

わたしの瑠璃には灯が映っているだろう

連れ添う岩から太ましい丸にすげ替わったブルーバック

透過する天井を焦がすヘリウムによって

潰れて熟れたトマトが実っているだろう

あるいは、もしかすれば

わたしが入った肉は、まだ沈没し続けているかもしれない

かたさの裏側という地平線

空行く竜の膚はだえから遣わされた水平線へ

不可視の壁との間の不和

生み出された橙を容れ物の表面で嗅ぎながら

骨間に残るミントを噛みながら水平になった、二の三乗時間後

わたしの石英は焼けた酸素と向き合っているだろう

抜け出せない水流に抱かれたルーティン

そこに絡み付いたわだかまりは解けている

しかし、同時に

重ねられてきた巻物は吹き飛ばされ

ささやかな幸福は立ち退かされている

災いは何も弁えない

もしくは、ひょっとしたら、とつくに

世界を捉えるべきわたしの硝子は溶けているかもしれない

羽毛の谷に牽引されて

肌色に温まったエンドロールを見届けながら